

上原 美術館 通信

No.
21

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2023年4月20日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp





写真① 十一面観音像(平安時代・10世紀) 重要美術品



写真② 大日如来像(鎌倉時代・文永七(1270)年)

仏像は、仏たちの姿を刻んだ聖なる像であり、仏教徒の信仰対象、心のよりどころです。古代中世、仏像を制作した仏師たちの多くは、宗教者でもあり、その優れた技術に、自らの信仰を込め、丹精込めて仏像を造りました。こうして造られた仏像は、彫刻作品として優れた造形力を示し、現代では美術作品としても高い評価を受けています。またこれらの仏像は、鎌倉時代なら七百年から八百年、平安時代なら九百年、あるいは千年を超える時を越えて、現代まで伝えられました。古い仏像は歴史を考える上で、貴重な文化財でもあります。

上原美術館は開館以来、優れた仏教美術の収集に努め、多くの仏像を収蔵してきました。十一面観音像(平安時代、十世紀、写真①)は、上原仏教美術館(上原美術館の前身)が、開館六年後の平成元(1989)年に収蔵した仏像で、古代中世以前のものとしては、当館最初のコレクションです。頭体の主要部

分をサクラと思われる広葉樹の一材で彫出した一木造りで、異国的な面貌が印象的な仏像です。一方、昨年度新たに収蔵し、今回初公開となるのが、納入願文により、鎌倉時代の文永七(1270)年に制作されたことが分かる、阿弥陀如来像です(表紙写真)。体に比して頭部がやや過大なものの、着衣の表現は的確、目には水晶製の玉眼を入れ、現実の人間を思わせる生々しい面貌で、写実的な鎌倉彫刻の特徴を良くあらわしています。前述の通り、本像は文永七年に制作されたことが明らかですが、実は制作年代が確定できる仏像は少なく、他の仏像の年代を考える上での基準となります。当館では、奇しくも同じ文永七年の像内墨書を持つ大日如来像(写真②)を所蔵しますが、この二像はこの時期の仏像の基準作として学術的に貴重なものです。本展では、以上ご紹介した三像を含む、当館が所蔵する全ての仏像を展示いたします。これが本展の「きれいな仏像」です。

古代中世の仏像が、彫刻作品として高い評価を受ける一方、各地の寺院やお堂を訪ねると、時代が降る数多くの仏像に出会います。その多くは、江戸時代に造られた仏像で、古くても四百年前、ほとんどが二百年そこそこの若い仏像たちです。江戸時代の仏像は新しいだけでなく、たいていは小さく、造形は拙く、見劣りがします。しかし、これらの像に向き合うと、それらのお像に込められた祈りと、素朴で愛らしい姿に触れ、心動かされます。

南伊豆町手石の青龍寺に伝えられた不動明王像(写真③)は、像高57.9cm。右腕と頭頂部以外を広葉樹の一材で造る一木造りの像です。それはともかく、この造形はどうでしょうか。頭部が大きく、腰の位置が低く、寸が詰まったような体躯。左右で太さが異なる肩と腕。素っ気ない大きな両足。吊り上がった両目には銅板を当て、三日月を伏せたような口は、ギザギザに刻み、歯列を表現しています。本像の台座底面には「元文二年正月二八日記之」とあり、この元文二(1737)年が制作年代でしょう。

不動明王像と同じ十八世紀半ばに制作されたのが、河津町谷津、栖足寺の稻荷神像です(写真④)。目尻が下がった顔に長い頸鬚を蓄える一木造りの小像で、右手に持った棒の先に稲束を下げていますが、当初は、左右の手で長い天秤

棒を持ち、棒の両端にそれぞれ稲束を下げる姿だったのでしょう。背面下部に「延享三年丙寅/葉範作之」とあり、延享三(1746)年に葉範なる人物が制作した像であることが分かります。

年代不明な像の中にも面白い仏像が沢山あります。河津町沢田、林際寺の木造誕生仏(写真⑤)は、貧弱な下半身に比して胸筋が発達した、いわゆる逆三角形の体格。頭上高く拳を突き上げるさまは、リング上で氣勢を上げるプロレスラーのようです。

上原美術館では開館以来、40年に渡り、伊豆の仏教美術の調査を継続してきました。調査によって見出された仏像の多くは、江戸時代のものですが、これまで上原美術館では、江戸時代の仏像を展示し、紹介する機会はあまりありませんでした。しかし、改めて見ると、江戸時代の仏像の中には、上手か下手かといえば、上手くはないかもしれない。美しいかと問われれば、返答に窮する。でも、素朴で愛らしく、個性的で愉快的な仏像が沢山あります。本展では当館が調査で出会った、そのような江戸時代の仏像を厳選して展示します。

当館所蔵の「きれいな仏像」と、伊豆に伝えられた「愉快的な江戸仏」の競演を是非ご覧ください。(田島)



写真③ 不動明王像(江戸時代・元文二(1737)年) 南伊豆町・青龍寺



写真④ 稻荷神像(江戸時代・延享三(1746)年) 河津町・栖足寺



写真⑤ 木造誕生仏(江戸時代) 河津町・林際寺

「雨」と一口に言っても、季節や時間、降水量や風の強弱といった違いで、恵みの雨になることもあれば、人々の生活を脅かすような暴雨になることもあります。古くから我々はさまざまな表情を見せる雨の変化に注視して生活してきました。梅雨、夕立、時雨、狐の嫁入り、天気雨、氷雨、雨女に雨男、雨奇晴好、雨宿りなど…雨にまつわる言葉は多く存在します。それは、日本人が細やかに雨の変化や状況をつぶさにとらえてきた証ともいえるでしょう。

日本画家・^{かぶら きよも 清方}は雨を好んだ画人でした。清方は「雨ならばたいの人はきらひな五月雨にも、秋ふる長雨にも、とりどりに詩情をさそはれ、畫心をよぶ」といい、多くの雨の情景を描きました。また、「静かな秋雨もいゝが、夏の^{じわかあめ}壯快な驟雨もいゝ。或るひはやゝ平凡ながら春の雨、それから冬の雨、わけ^{ひさめ}ても冷雨の情趣はすてがたい」とも記しており、季節を問わず、それぞれがもつ雨の趣をたのしんでいたようです。

清方は画家を志したころから雨に興味があったようで、18歳のときに手掛けた《初冬の雨》(新収蔵、図1)にも雨情が描かれています。この作品は、89歳の清方が自作と再会した際に^{ことばがき}詞書を残し、それは後に作品とともに表装されました。詞書には「明治の東京は四季折々の風物詩二富む 中にも初冬の雨の日 焼芋屋の白い煙が巷に流れる思ひ出は深い この画は私が成人に近い頃友人たちと研究の廻覧雑誌に画けるもの今かく記す昭和四十二年から七十年の昔になる あちさるのや主人」と記されています。清方は15歳頃から書画研究会に入り、肉筆回覧誌に絵を描いており、《初冬の雨》もそこに綴じた作品の一つでした。《初冬の雨》を描いてから59年後、77歳を迎えた清方は《十一月の雨》(図2)で同じく冬の雨が降るなか、白い煙がたなびく焼芋屋を描いています。こちらには路上の花売り^{えぞうしや}と幼少期に清方が親しんだという絵草紙屋も描かれ、より明治の面影を色濃く伝えています。雨降りの焼芋屋は清方の脳裏に懐かしい冬の情景として強く残っていたのでしょう。制作時期は異なりますが、いずれも雨に濡れる明



図1 錦木清方《初冬の雨》1896(明治29)年
©Kiyoo Nemoto 2023 / JAA2300051



図2 錦木清方《十一月の雨》1955(昭和30)年
©Kiyoo Nemoto 2023 / JAA2300051



図3 錦木清方《木母寺夜雨》1936(昭和11)年
©Kiyoo Nemoto 2023 / JAA2300051

治・下町の生活を生き生きと伝えていきます。

《初冬の雨》と同様、新収蔵された《木母寺夜雨》(図3)は、江戸名所とされていた木母寺境内で傘をさした二人の女性の歩む姿が描かれています。提灯に照らされた女性たちの周辺以外は、薄墨で闇夜が表現されています。画面右上に植えられた柳、その奥にある松の木に、雨が情緒豊かに降雨しています。

本展では上原美術館が所蔵する日本画家・錦木清方を中心に日本画から油彩画まで、雨が描かれた上原コレクションを厳選してご紹介します。

雨にかすむ光景を彩り豊かな色彩であらわしたピエール・ボナール《雨降りのル・カネ風景》、雨に濡れる大輪の牡丹を描いた松林桂月《牡丹》、雨あがりの情景が幻想的な牛島憲之《雨明かる》——これらの作品には、雨にぬれるからこそ一層美しく輝き、雨だからこそみられる情景が捉えられています。雨にまつわる上原コレクションの魅力をどうぞおたのしみください。(土屋)

雨が降るとついつい口ずさんでしまうのが、「あめあめ ふれふれ 母さんがじゃのめで おむかえ うれしいな」で始まる童謡『あめふり』。そのあとに続く「ピチピチ チャブチャブ ランラン」というフレーズは、無邪気に子どもが水たまりを踏みながら、お母さんと一緒に楽しげに雨の中を帰宅する姿を想像させます。憂鬱になりがちな雨の日が、この歌を聴くだけで実にウキウキした楽しい雨に変わっていくようで、個人的に好きな部分です。

『あめふり』の歌詞にてくる「じゃのめ」は、蛇の目傘を示しています。蛇の目傘は、江戸時代に番傘(太い竹製の骨に厚い油紙を張った安価な雨傘)を改良して考案された上質な雨傘です。番傘にくらべ、細身で、繊細な装飾が施された蛇の目傘は、明治以降、主に女性がさす雨傘として活躍しました。傘を広げると太く引かれた白い円が現れて、これが蛇の眼^{へび}に似ていることからその名がついたといわれています。現在、雨の日に蛇の目傘は

もとより、和傘と呼ばれる和紙や竹など天然素材で制作された傘をさして歩いている人はまず見かけません。京都などの歴史ある街並みや和装の写真撮影、歌舞伎の世界などでは見かけることもあります。

今ではほぼ手にすることがない蛇の目傘ですが、『あめふり』の歌が作られた1925(大正14)年、100年近く前には、まだ蛇の目傘の愛用者が多くいたことがうかがえます。それならば、明治時代の下町を描いた錦木清方の作品に、蛇の目傘が多く登場するのうなずけます。清方が1955(昭和30)年に、明治を懐古して描いた《十一月の雨》(図1)では、中央に蛇の目傘をさし、雨の中を歩む女性が描かれています。女性のさした傘の内側の小骨部分には、鮮やかな朱色の飾り糸が編み込まれ、華やかな色彩を放っています。蛇の目傘の特徴の一つである飾り糸の装飾は、清方にとって目を引いた要素だったようで、当館の作品だけでも《初冬の雨》(図2)、《木母寺夜雨》、わずかで

はありますが《待乳夜雨》(図3)にも飾り糸がかかった傘の内側が描かれています。蛇の目傘をもつ女性の仕草はいずれも粹で、美人画家として名を馳せた清方の美意識を垣間見ることができます。

清方の作品には、傘一本にまで温かな愛着をもって描いていることが伝わってきます。また、清方が描いた雨の作品をじっくり見てみると、濡れた路上、降り注ぐ雨のようすがそれぞれ異なることに気がきます。身近な雨ではありますが、季節や状況に応じて観察を重ね、一番適した描き方を模索し、それぞれの雨情を清方は捉えています。ぜひ、蛇の目傘をはじめとする細やかな描写に注目しながら、雨の絵画をおたのしみください。



図2 錦木清方《初冬の雨》部分、1896(明治29)年
©Kiyoo Nemoto 2023 / JAA2300051



図3 錦木清方《待乳夜雨》部分、1920(大正9)年
©Kiyoo Nemoto 2023 / JAA2300051



図1 錦木清方《十一月の雨》部分、1955(昭和30)年
©Kiyoo Nemoto 2023 / JAA2300051

ギャラリートーク

開催中の展覧会内容について、担当学芸員が解説を行いました。展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむを得ず中止になる場合がございます。詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

授業入館

- 2022年 12月13日 下田市立下田小学校
- 12月14日 下田市立稲梓小学校
- 2023年 1月31日 下田市立下田認定こども園
- 3月9日 下田市立大賀茂小学校

小学校は美術鑑賞の授業や、地域学習、修学旅行前の事前学習で、認定こども園は美術鑑賞で来館しました。こども園は展示している作品を学芸員と一緒に見ながら質問に答えて解説、小学生には作品鑑賞とアートカードのゲームを行いました。

出張授業

- 2022年 12月22日 静岡県立静岡文化芸術大学
- 2023年 1月24日 河津町立河津中学校

田島整主任学芸員が静岡文化芸術大学で博物館学の講座でお話をしました。河津中学校は修学旅行前の事前学習として奈良や京都である仏像について解説しました。

調査

2月16日 三島市内寺院調査

かなみ仏の里ボランティアガイドおよび調査先寺院の協力のもと、仏像調査を行いました。三島市内でも地域の歴史を考える上で貴重な作例が見出されています。

作品展

- 仏像彫刻教室 2月28日～3月4日
- 写経教室 3月7日～3月11日
- デッサン・水彩画教室 3月20日～3月25日
- 日本画教室 3月29日～4月2日

当館で開催している実技講座4教室の受講生作品展をアトリエ棟で開催しました。1年間の成果を発表する展示会は受講生の力作が並びました。



ギャラリートーク



授業入館 下田小学校



授業入館 稲梓小学校



授業入館 大賀茂小学校



作品展 仏像彫刻教室



作品展 デッサン・水彩画教室

冬のワークショップ『親子で色あそび、透明水彩で』

当館アトリエ 1月22日、2月4日

冬のワークショップ『親子で色あそび、透明水彩で』を2日間、開催しました。こちらのワークショップは、大人気のイベントで、2022年度は夏の開催に引き続き2回目の開催となりました。今回も応募者多数につき抽選を行い、選ばれた8組の親子、合計20名にご参加いただきました。講師の小野憲一先生(現代美術作家、当館デッサン・水彩画教室講師)とともに、赤、青、黄の透明水彩絵の具を贅沢にたっぷりを使い、画用紙に描いていきました。2色で描くグラデーションからはじまり、3色の配合を変えて混ぜたりしながら自由に色遊びを行いました。混色での色あそびを楽しんだ後は、青一色のみで水を多く含めて描いたり、にじませたりと、さまざまな表現に取り組みました。通常の筆に加え、大きな刷毛や歯ブラシなどを使って、親子で夢中に描く姿が見られました。最後は、それぞれの親子が協力して1枚の大きな画用紙に作品を描き、3時間のワークショップを終了しました。参加者からは「絵を子供と一緒に描くことがないので、一緒にお互いの絵を見ながら描く楽しさを知ることができました」、「自由にかけておもしろかった」などの感想を聞くことができました。


また、制作の合間には、会場となった当館アトリエの壁に掲示されていた、さまざまな形や色で彩られた「色あそび」の見本(小野先生が事前に制作して下さった作品)が参加者の目を楽しませていました。(土屋)

上原美術館では、子供向けから大人向けまで様々なワークショップを不定期に開催しています。興味・関心がある方は当館までお問い合わせください。

講演会『梅原龍三郎の生涯と芸術』

3月26日、下田セントラルホテルにおいて、梅原龍三郎の曾孫で美術史家の嶋田華子さんを講師にお招きして、講演会を開催しました。春雨の中、100名もの方々にご来場いただきました。

嶋田華子さんには2008年の講演会「梅原龍三郎と京都」でもお話いただき、それから15年ぶりの開催となります。以来、上原美術館では嶋田さんとともに継続して梅原龍三郎画伯の共同調査を行い、特別展『梅原龍三郎と伊豆』へと繋がりました。今回のお話では、ご家族ならではの視点から梅原龍三郎の生涯を辿り、その芸術の魅力に迫りました。(土森)



特別展カタログ発行のお知らせ

特別展『梅原龍三郎と伊豆』のカタログを発行いたしました。展示したすべての作品と解説、および論考が掲載されています。本展で初公開となる梅原龍三郎の貴重な資料を収録。1冊1,000円で美術館受付にて販売しております。詳細はお電話(0558-28-1228)またはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にてお問合せください。



伊豆 だより



南伊豆町・青野川沿いの河津桜

毎年2月には下田のお隣、河津町や南伊豆町から河津桜の開花の声が聞こえてきます。今年は新型コロナウイルス感染症が発生してから、2年ぶりに桜まつりが開催されました。桜の開花中は、多くの方が河津川や青野川沿いの河津桜を楽しまれたようです。美術館周辺でも河津桜があちこちで見られました。

3月から4月には、松崎町的那賀川や下田市内を流れる稲生沢川沿いのソメイヨシノが開き、さらに華やいだ季節がやってきます。伊豆の山々に咲く山桜もこの時期の見どころの一つ。山に広がるパッチワークのような景色は美術館の周りでも楽しめます。
(櫻井)

美術館 ニュース



四面女神像(平安時代) 裾野市・茶畑浅間神社

特別展『無冠の仏像』展示の神像が文化財に！

当館が開催した特別展『無冠の仏像—伊豆・静岡東部の無指定文化財』(会期:2022年10月8日~2023年1月9日)は、文化財にこそ指定されていないものの、貴重な仏像や神像を展示した特別展。展示を通じて、公的な文化財指定を受けていないなかにも、大切な文化財が沢山あることを多くの方に知っていただき、文化財保護や、新たな文化財指定につなげたい。そのような思いを込めた展示でした。本展では二十二体の彫像を展示しましたが、このうち三体が、去る2月22日、文化財指定を受けました。

新指定を受けたのは、裾野市茶畑地区の茶畑浅間神社すそのしちやばたけに伝えられた四面女神ちやばたけせんげんじんじや像と、二体一対の隨身像しめんめがみで、いずれも平安時代の像です。四面女神像は、一つの身体の前左右に一面、合計四つの顔を持つ像で、墨描きで長い頭髪をあらわすため、女神像と考えられます。富士山の神の姿をあらわしたものと考えられますが、このような姿の像は、他には、かつて同じ神社にもう一体伝えられていたことが知られているのみで、珍しく、貴重な像です。富士山麓の町、裾野市が彫刻を文化財指定するのは初めてのことです。
(田島)